

茨田堤の雁の子の伝承

奥田 尚

(一)
茨田堤の雁の子の伝承とは、仁徳紀五〇年三月五日条に記された次のような伝承のことである。

(1)河内の人が「茨田堤に雁が子を産んだ」と報告した。

即日、使者を派遣して調査させたが、事実であった。

そこで仁徳は歌で武内宿弥に問った。

①たまきはる 内の朝臣 汝こそは 世の遠人

汝こそは 国の長人 秋津嶋 倭の国に 雁産むと

汝は聞かずや

(朝廷に仕える武内宿弥よ、あなたこそは世に長生きの人だ、国の長生きの人だ、そのあなたは倭の国に雁が子を産んだと聞いたことがありますか)

武内宿弥は歌で返答した。

②やすみしし 我が大君は うべなうべな

我を問はずな 秋津嶋 倭の国に 雁産むと

我は聞かず

(我が大君が質問なさるのはもっともなことですが、質問なさらないでください、倭の国に雁が子を産んだなどとは、私は聞いたことはありませんから)

この伝承に酷似した伝承が仁徳記にみえる。

(2)あるとき仁徳は宴会を開くために日女島に行幸したが、その島で雁がタマゴを生んだ。そこで建内宿弥を召して、歌で雁がタマゴを生んだことについて尋ねた。

①たまきはる 内の朝臣 汝こそは 世の長人

そらみつ 倭の国に 雁卵生と聞かず

建内宿弥は歌で返答した。

②高光る 日の御子 うべしこそ 問ひたまへ

まこそに 問ひたまへ 吾こそは 世の長人

そらみつ 倭の国に 雁卵生と 未だ聞かず

琴を給わって歌を歌った。

③汝が御子や ツヒニ知らむと 雁は卵生らし

これは本岐歌(寿歌)の片歌である。

(二)

仁徳紀の伝承(1)と仁徳記の伝承(2)の最大の相違点のひとつは、場所が茨田堤と日女島となっていることである。その第二は(1)がふたつの歌を記し、(2)が三つの歌を記す点である。しかし(1)の①・②と(2)の①・②は、歌詞が少し相違するものの、大筋では合致している。

一般的にいつて、紀と記に共通する伝承のある場合は、記のほうが古い形をしめすことが多いといわれ、この場合もそうであろう。古い伝承にはあった(2)の③の歌が、新しく採用するにあたって削除されたものといえる。(2)の③は、記にホキ歌つまり目出たいお祝いの歌と記されているのに、なぜ紀には採用されなかったのであろうか。まず、(2)の③の歌の解釈を調べてみよう。

日本古典文学大系本の『古事記』(倉野憲司校注)は頭注に、「汝が御子」について「多くの注釈書は、汝王でここでは天皇を指すと説いている。しかし汝が御子即ち天皇の皇子の意には解せられないであろうか」とし、「ツヒニ」の解釈の相違もしめし、歌全体の意味は「あなた様の皇子が、どこどこまでも、天の下をお治めになろうとして、その祥瑞として雁は卵を生むそうな」であろうという。

同大系本の『古代歌謡集』(土橋寛校注)は、「天皇さま(仁徳)が末長く長生を遊ばして日本の国をお治めになるであろう、その目出たいしるしとして、雁が卵を産んだのでございましょう」の意とする。

「汝が御子や」は原文では「那賀美古夜」であるが、それを「あなた様の皇子が」と解そうが、「天皇さま(仁徳)が」と解そうが、どうにも落ち着きが悪い。

「天皇」は(1)の②では「やすみしし 我が大君は」であり、(2)の②では「高光る 日の御子」である。「ながみこ(汝が御子)や」には、「やすみしし」・「たかひかる」といった修飾がまったくないことが気にかかるのである。「ながみこ」は単に「あなたのお子さん」であって、物語りと切断すれば、「ながみこ」が天皇の皇子や天皇そのものを指すことにはならないであろう。

記がこの歌をホキ歌の片歌と記すことも気にかかる。片歌は五・七・七の詞形のことであり問題はないが、何をことほぐ歌かよくわからない。雁は冬鳥で冬を日本で過ごし、春には北方へ帰って産卵するのが普通である。雁が日本で産卵することがあるのかどうか不明であるが、少なくとも(1)・(2)では空前の出来事だとしている。珍しいがたまにはあることなら祥瑞になりうるが、空前の出

来事など祥瑞にはなりえないであろう。空前、あるいは絶後かもしれないようなことに託して天皇あるいは皇子の支配をことほぐとは、ありうることであろうか。

これらをあわせ考えると、(2)③の歌にはもつと別の背景がありそうである。そこで(1)の場所が茨田堤であり、(2)がヒメシマであることの意味を考えてみよう。

(三)

ヒメシマは『撰津国風土記』の逸文にもみえる。その伝承は、応神朝に新羅から女神が夫を逃れて渡来し、はじめは筑紫国の比売島（大分県姫島か）に住んだが、夫の男神が探しに来ることを恐れて、撰津国の島に移ったので島の名前を比売島と名づけた、という。応神記には新羅王子の天之日矛が、太陽が賤しい女に生ませた赤い玉の変身した娘を妻としたが心がおどったために娘は「祖の国」に帰り、ヒボコがそれを追って来国したという伝承がある。この娘は難波の比売碁曾社の阿加流比売神であると記す。

ヒボコの伝承は垂仁紀にもあるが、内容が異なる。応神記のヒボコ伝承に酷似するのは、同じ垂仁紀の都怒我阿羅斯等の伝承である。アラントは意富加羅國の王子で、

角鹿（福井県敦賀）に來國した。アラントは自分の黄牛と交換にある村の神である白い石をえたが、石は娘に變身した。娘はアラントの妻となったが、アラントの留守にどこかに消えてしまった。アラントは東へ去ったという娘の後を追って來國した。娘は難波に着いて比売語曾社の神となり、また豊國の國前郡の比売語曾社の神となり、二處に祭られたとある。意富加羅は新羅と百濟に囲まれたいわゆる任那地域の國であるが、アラントの伝承には垂仁が任那の國名を与え、アラントの歸國にさいして与えた赤織の絹を新羅が奪ったことから、任那と新羅の敵対が始まったとある。

新羅と任那という敵対する二國の伝承に分かれてはいるが、玉（石）が娘に變身し、娘が日本に來て女神となったという本筋は一致する。玉（石）↓人（女）↓女神という變身というのでなければ、玉↓女神は紀の神話にみられる。第六段の一書の第二に、スサノヲが献上したマガ玉をアマテラスが噛み砕いて、イツキシマヒメ・タコリヒメ・タギツヒメの三女神を産みだす。第六段本文・一書の第一・第三は、この三女神をスサノヲの劍をアマテラスが噛み砕いて産みだしたとし、紀の神話も同様である。

三女神は筑紫の胸形（胸肩）君の祭る神とされる（記・紀）。『筑前国風土記』逸文かとみられるものに、宗像の大神が天より降り、青色の玉を輿津宮のしるしとし、紫色の玉を中津宮のしるしとし、鏡を辺津宮のしるしとしたとある。この伝承は古代の『風土記』のものかどうかは疑われているが、ムナカタ社の神体が玉であるという伝承があったことはうかがえよう。

『豊前国風土記』逸文をみると、鹿春郷（福岡県田川郡香春町）は新羅国の神が河原に住みついたとある。しかし、『釈日本紀』（鎌倉末成立）には豊州のヒメゴン社は、『豊前国風土記』にも『延喜式』にも記載がないという。『延喜式』卷一〇には豊前国宇佐郡に「比売神社」を載せるが、これとヒメゴン社の関係はよくわからない。しかし、鹿春郷の伝承があることからみても、豊前と新羅の関係は深いとみてよからう。

豊前国には大宝二年（七〇二）の戸籍の一部が残っているが、秦部姓が極めて多い。また天平一〇年（七三八）には豊前国の国司の目に従八位上の秦子虫がいる。秦氏は出自を中国の秦の始皇帝に結びつけるが、秦韓リ辰韓の出自とみるのが自然であろう。いうまでもなく、辰韓の統一は新羅により達成されており、秦氏は政治的には

新羅の統一の敵対者であり、敗北して日本に來国したものであろう。秦氏は文化的には新羅系とみることも可能で、広い意味で新羅系渡来人としてよからう。豊前の新羅系文化にかかわる要素は、秦氏の手によって導入されたとはいえる。

一方、茨田堤には仁徳紀一一年是歲条に、「新羅人朝貢す。すなわちこの役に勞す」とあり、新羅人が茨田堤の建設などに従事したとする。また仁徳記には、「また秦人を役ちて茨田堤また茨田三宅を作り、また丸廻池・依網池を作り、また難波の堀江を掘りて海に通わし、また小橋江を掘り、また墨江の津を定めたまひき」とある。秦氏など新羅系渡来人の茨田堤の工事への関与をすることができる。ヒメシマが新羅の女神の島であり、茨田堤に新羅系渡来人の活躍があつてみれば、雁の子の伝承は本来は新羅系渡来人集団に伝承されたものと推定できる。

四

茨田堤の雁の子の伝承が新羅系渡来人集団に伝承されたものとすれば、伝承の解釈は大幅に変わらざるをえない。新羅王の始祖伝承との関係を考慮せざるをえないからである。

新羅王の始祖伝承は『三国遺事』によれば、稲妻のよ
うな光りが地に垂れ、井戸の側に白馬がひざまずいてい
るので、みると紫のタマゴがあった。タマゴをさくと男
子が生まれ、初代の王となったというものである。

初代の王がタマゴから生まれたというのは新羅に限ら
ず、高句麗やそれと同祖という百濟、さらには六伽耶

(任那・加羅地域)にも共通する。タマゴから始祖王が
誕生するのは、朝鮮半島諸国に共通する始祖伝承である。

朝鮮半島と日本列島の地理的位置からみても、両国の
交流の深さからみても、記・紀神話の一部にでもタマゴ
から誕生するモチーフがあってもよさそうである。たし
かに紀神話の冒頭は、天地がまだ分かれておらず「鶏子」
のように混沌としていたころ、という記述に始まる。こ
れはすでに『芸文類聚』の「天地混沌如鶏子」などから
の引用であると指摘されている。これ以外に目立ったタ
マゴの記載はないようである。

仁徳記の歌(2)の③が、「あなたの(雁の)お子さん
(子供)がいつかは天下を治めるだろうと、雁はタマゴ
を生んだのでしよう」とか、「あなたのお子さんに天下
を治めさせようと、雁よ、あなたは卵を生んだのでしょ
う」とかと理解できれば、新羅系渡来人集団の長の始祖

伝承に関するものであったとみる事ができる。

さらに憶測を重ねれば、仁徳の和風謚号のオホサザキ
ハオホ(美称) + サザキ(ミソサザエ・鳥の名前)がミ
サザキハミ(美称) + サザキ(陵墓)から発想されたとい
う説があるが、それ以上に鳥の名前であることに注目
する必要がある。仁徳記にはこの雁の子の伝承以外にも、
女鳥(女トリ)王と速総別(ハヤブサ別)王の反逆の伝
承があり、サザキが鳥の名前であることを意識している。

紀にはさらに数多くの鳥の名前と関係する伝承がある。
仁徳の誕生のときに木菟(ツクハミツク)が産室に飛
びこんだ、俱知(クチリタカ)とそれを使う獵、白鳥(シ
ロトリハクチョウ)陵の陵守の話、築陵時に鹿の耳か
ら百舌鳥(モズ)が飛びだした話などである。

サザキに限らないが、鳥がタマゴから生まれることは
常識である。サザキの名前を持つ天皇がタマゴから生ま
れても不思議ではない。茨田堤の雁の子の伝承が直接結
びつくかどうかは疑問であるが、サザキ天皇がタマゴか
ら生まれたという伝承の存在を暗示しているのではなか
ろうか。

(本稿は昭和六十二年度金谷治教授を研究者代表とする文部
省科学研究費の筆者分担の成果の一部である)